



お芝居大好き！九条の会～テアトル9 って何??

2004年、井上ひさし、大江健三郎等9名の著名人が日本国憲法九条を守る「九条の会」を結成。その呼びかけに応え、演劇鑑賞会の会員有志で2005年「お芝居大好き！九条の会～テアトル9」を作りました。

月1回世話人会を持ち、ニュースを発行しています。興味のある方は、一緒にしませんか？下記世話人までご連絡を！

国会議事堂前抗議集会（7月1日）に参加して その2

7月1日の朝、「今日にも閣議決定」の記事に矢も盾もたまず、安倍自公政権に鉄槌の思いで官邸前へ抗議に行くことと決めた。テレビでは中々報道しないが、前日の30日も首都圏を中心に全国各地から何と数万人もの人たち（主催者発表）が駆けつけ、熱く抗議行動を繰り広げていたのだ。『今日は夜中になるかなあ！』連れ合いも力が入り、私も覚悟して向かった。国会議事堂前駅前から地上に出て、さて群衆を見渡すと、若者が一杯！どうやら大学生たちが組織するところに入り込んだようだ。その中に年輩者の顔も混じり、夜10時前の官邸前はムンムンと熱気に満ちていた。ドラム叩いて、若い声がリズムカルにリードする。『解釈改憲絶対反対！』『安倍は辞めろ！』『戦争反対！』『ファシストくたばれ！』『安倍は出て来い！』『若者殺すな！』『原発再稼働絶対反対！』

私たちのすぐ前には警官が向き合い、正に睨み合いの構図。対峙した警官にも訴えかける様に、拳を上げ、腹の底から精一杯の声を張り上げて、シュプレヒコールは一秒も途切れることなく続いた。緊迫した中にも意気軒昂な我々とは対照的に、真ん前に立つ若い警官は、目を合わせると生気のない顔で伏し目になる…立場を超えて、もっともと広くこの抗議行動を国民の運動にせねば！戦後、最低最悪の安倍自公政権に、これ以上好き勝手やらせてなるものか！官邸前に着いてから、怒りにまかせて一時も休むことなく声を張り上げていた御蔭で、いつの間にか酸欠気味で頭はふらふら、ノドはからから～もうぎりぎりい～と言うところで、リーダーらしき若い男性が、『みなさん、11時をまわりましたので、今日の抗議行動はこれにて終了したいと思います。次は週末に集まって渋谷をパレードしますので、みなさん横に拡散して、また沢山の参加をお願いします』なるほど、こんな風に礼儀正しくまとめて、また次へと繋げて行くのか…少々過激なフレーズ唱和もあつたけれど、彼らはちゃんとわきまえて行動しているのだ。潔さに感心し、心強く思った。若い世代のエネルギーは何とも頼もしく、私自身とても励まされた。この翌日、沖縄辺野古の「新基地」を取り巻く緊迫した状況が報道ステーションで取り上げられ、思わずテレビ前に走り寄った。今年初めて沖縄を訪ね、その地で毎日々地道に闘い続ける皆さんと交流して、益々沖縄への思いも強くなっている。どれもこれも私たちの未来を左右する重大な問題だ。一部の、到底まともとは思えぬ人達に真逆へもって行かれて成るものか。決して、決して、諦めず、必ず私たちの闘いが勝利すると信じて進みたい。☆ 合掌 ☆

(お江戸の酔ッパライ)



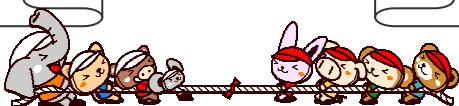
講演会のお知らせ

—江戸幕府の軍縮政策—
についてお聞きします

講師 松浦 昭 氏
(兵庫県立兵庫大学名誉教授)
日時 11月23日(日)
14時00分～16時00分
場所 サンパル7F会議室
参加費 500円

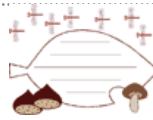
若手弁護士第4弾 濱本由さんのお話を聞いて

8月24日(日)サンパル7階会議室にて14名の参加。新聞記事やニュースなどで見聞きして「集団的自衛権」とはきな臭いと、なんとなく感じていたものの「集団的自衛権という言葉」として捉えていただけであって、自分とはかけ離れた話と体をすり抜けていた。しかし、政府の説明や決め方の経緯、集団的自衛権を行使するということはどういうことになるのか、閣議決定は政府の意思表示であり国民の行動が変わるのではなく、国民の行動が変わるのは個別立法が変わった時、といったお話を聞いて、戦争のない平和な日本を守りたいと一人ひとりが意識して声を上げていかなくてはと思いました。濱本さんは男の子二人のお母さん。「…学校の教え方によっては、子どもたちが集団的自衛権を肯定的に捉えたときに、母である自分が否定的なことを言ったら、戸惑うだろう。」という親として弁護士としての言葉が印象的でした。(曾孫熊貓サークル 濱田潤子)



～ お芝居と平和 ⑧ ～

『火山灰地』 1961年11、12月例会



丸山眞男くんはねえ「俺は、『火山灰地』の初演を観たんだぞ」って、威張るんだ。私も観たかったけど、刑務所の中に居たから観られなかったんだ。

負けん気の強い久野収さんの悔しそうな表情が目に見え。1938年久保栄によって書かれ、直木賞候補作品にも挙げられた『火山灰地』はその年築地小劇場で上演された。

1924年に建設され本年90年を迎える築地小劇場の建設までの経緯とその後の歴史については、演劇関係者、愛好家にはよく知られたことなので割愛する。世に言う人民戦線運動の一翼を担い反ファシズムの文化を紹介し続けた雑誌『世界文化』編集の実質的責任者として治安維持法違反による実刑判決を受け服役中の久野さんは、『火山灰地』の初演を観ることはできなかったのだ。大学卒業後助手として残り閉塞的なアカデミズムのなかで悶々とした日々を送っていた丸山さんは、舞台の主人公雨宮聡の生き方に感動し科学者として生きてゆく決意をした。涙が止まらなかったという。芝居の力、もって知るべし。戦後久野さんは、市民運動の理論的、精神的支柱として、丸山さんは、ファシズム分析、日本思想史研究にと論壇にアカデミズムにとそれぞれ所を得て目覚ましい活躍をした。

演劇鑑賞会の60年の上演作品をならべて気づくのは直接、間接を問わず『平和』というテーマが地下水脈のように一貫して流れていることに気づく。思うに「平和」というのは、芝居を演じる者にも、芝居を観る者にとっても必須のものである。(上原良蔵)



テアトル9 お知らせコーナー

- ◎ 閣議決定された「集団的自衛権行使容認」反対の署名を集めています。ニュースと一緒に同封していますのでご協力をお願いします。(演劇鑑賞会事務局か世話人へ預けて下さい)
- ◎ 「日本国憲法をノーベル平和賞に」の署名が200筆が集まりました。一時は有力候補に浮上したこの取り組み、全国で44万人の署名が集まったそうです。来年へ向けてねばり強く取り組んでいきましょう！！

例会場「テアトル9コーナー」にお立ち寄りください！

テアトル9グッズのプラバン、また賛同者の方にはニュースをご用意しています。カンパも大歓迎！ご連絡は下記まで
児玉 090-8209-2391
米田 090-8658-8579
谷中 090-2101-4579
田中 090-8493-3378



おすすめの本

「水の透視画法」

作者 辺見 庸

3・11以降…「眼前のこの死者の群れ、この破壊、この瓦礫、この廃墟、そしてこの忘却のはやさ…」神戸新聞に連載されていた辺見庸の随筆が文庫になりました。混沌とした今の社会現象の中で、辺見庸は短い文章を通して、「忘却」してしまわない事を教えてください。

集英社文庫 680円



〈 2014年7月12日 ロンドン観劇記 〉

『るつぽ』を観て考えたこと

ロンドンのオールド・ヴィック劇場で『るつぽ』(アーサー・ミラー作)を観た。幕が降りたとき、興奮と演じられた深い人間像に、言葉が出なかった。

1692年、マサチューセッツ州、セイラムの村で起きた些細な出来事。それがやがて魔女狩りに発展し、大勢の村人を死刑に、恐ろしい出来事になった。

舞台はこの恐ろしい出来事が起こる過程を丹念に描く。そして、出来事だけでなく、その過程の人間の内面まで細かく描く。ほとんど装置のない、円形の板の上で、全身黒づくめの衣装を着た俳優たちが、ごく自然に、場面ひとつ、ひとつの人間の心理を演じる。それが、頂点に達したその時、黒い固まりに見える登場人物たちは、狂気に走っていく。この村に魔女が居る。村全体を神が抑圧していた時代。魔女は神にあらがうもの。魔女の存在は有ってはならない。村全体が魔女探しへの狂気で包まれる。記録によると19人の絞首刑、拷問、投獄、逮捕者合わせて405人の犠牲者を出し終息をむかえた。ほんのちょっとした事で、善にも走り、狂気にも走る。人間の持っている弱さが胸に突き刺さったから。日頃考えていたことであっても、目の前で演じられると改めて、自分に問い直した。

17世紀、セイラムで起こった事件は、現在でも十分に通用する。憲法九条を変えようとしたり、失敗すると集団的自衛権を行使する等、69年間戦争をしなかった国を、戦争へと導く動きが、すでに始まっている。あれよ、これよと言っている内に、セイラムで起きたことと同じことが…。と、悩める毎日です。

(エバレット・小谷博子)